

入選

テーマ：未来のための今を生きる
「未来のロシナンテ」

大分県立竹田高等学校3年 高橋 健太

ロシナンテ。ドン・キホーテの乗るやせた馬の名前だ。「私たちはロシナンテの様に、一人ひとりは無力かもしれない。でも、そんなやせ馬が集い、複数形のロシナンテスとなったら、世界を笑顔にできるのではないかと思うのです」。講師の川原尚行さんはそう言ってほほ笑んだ。7限目の総合的な学習の時間に僕ははるるどと体育館に集まった。特に期待もせず始まった進路講習会。いつのまにか僕は講師の話の前めりで聴いていた。

医師である川原さんは、外務省の医務官として赴任したスーダンで、多くの子どもが命を落とすのを目の当たりにしたそうだ。官僚としての限界を感じ、NPO法人ロシナンテスを立ち上げる。年齢は僕の父と同じだ。川原さんに親近感を持ったのはそれだけではない。僕らに語りかける際の熱量のようなものが、どこか父を思い出させるのだ。

受験生である僕らは、「志望理由書」を何度も何度も書かされる。所属する山岳部の先輩は、医学部看護科に進学した。「いつの日か、国境なき医師団に入り、アフリカの人々の力になりたい」。卒業式後の部活動送別会で彼女はそう夢を語ってくれた。小さな彼女が大人びて見えた。決意を秘めたまなざしがまぶしかった。

志望理由書はいつも同じことを書く。「まだ具体的な夢を描けずにいる私は、社会科学系の学部で籍を置き、さまざまな活動を通じて、自分がどのような形で社会に貢献できるかを見つけないと思いません」。そして、「仕方ないじゃん。今は本当にそうなんだから」と心の中で呟くのだ。そしていつも、そんな自分がかっかりする。

川原さんはプレゼン資料のひとつをスクリーンに投影した。「義を見てせざるは勇無きなり」。言葉の意味は知っていた。出典は論語だ。「人

としてしなくてはいけないと思いつつ、それができないのは勇気がないからだ」という意味だ。川原さんの場合、スーダンの惨状を見て行動を起こした。さて、僕はいつたい、何ができるのだろう。焦る気持ちが強くなった。知識ばかり詰め込んだ僕の頭は、確かに情報量は増えたかもしれない。受験勉強のおかげだ。しかし、いくら知識が増えても将来の夢は相変わらず像を結ばない。

ある日、思いあまって父に相談した。父にとっての自己実現とは何かと。父は即答した。「高校の英語教師として世界平和に寄与するような若者の育成だ」と。よどみなく発した言葉にうそはないと父は言う。「後付けだけだな」と言って笑う父を見てうらやましく思った。川原さんと同じ目だと感じた。

「行くぞーロシナンテス」という本を早速注文した。川原さんの行動の原点は何か、知りたくて一気に読んだ。川原さんは目の前に困っている人がいれば、さっと手を差し伸べる人なのだ。何ができるかなど考えもせずに。自分一人では無理だと思えば、仲間を助けを求める。生まれつきの性格なのか、ご自身が育んだものかは分からない。川原さんは「行動の人」だ。

僕は川原さんにはなれない。しかし、僕には僕にしかできないことがきつとあるはずだ。今はそう思えるようになった。そして同時に思うのだ。僕はまだ自分の人生のスタートラインに立ったばかりではないかと。焦る必要はない。これから僕は目の前に現れる多くの選択を強いられるだろう。進む道を選ぶ際はより難しそう、それでいて楽しそうな道を自分の判断で選ぼうと思う。一人で不可能なときは、川原さんが高校時代のラグビー部仲間と協力を求めたように、僕も仲間を助けを求めるのだ。

僕はまだ、やせっぽちのロシナンテに過ぎない。でもきつと、いつかこの手で、社会のために、人々のために、そして自分のために、「僕はここで生きていくぞー」と胸を張りたい。